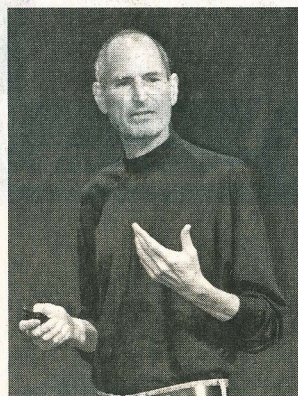


無症状で進行「神経内分泌腫瘍」

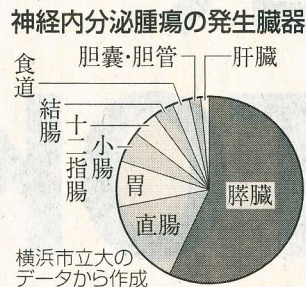
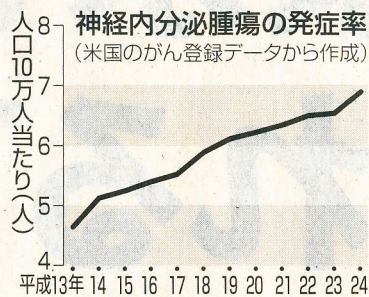
ジョブズ氏も…急増する希少がん

「神経内分泌腫瘍(NET)」という聞き慣れない悪性腫瘍が急増している。米アップルの共同創業者、故スティーブ・ジョブズ氏「写真(共同)」が発症したことで知られる。日本では膵臓や直腸など消化管で見つかることが多いが、一般的な膵臓がんや大腸がんとは性質が異なり、違う治療が必要だ。診断法や薬剤による治療法が進歩した一方、欧米で承認された放射性物質を利用した治療が日本では未承認のため、海外渡航を選ぶ患者もいる。どのような病気なのか、専門家に聞いた。



日本で1万1千人

NETの患者を多く受け入れる横浜市立大の市川靖史教授によると、NETはまれな希少がんに位置付けられているが、平成22(2010)年に世界保健機関(WHO)が初めて腫瘍の分類を明確化して以降、世界的に診断例が増えた。日本でも、国際医療福祉大の伊藤鉄英教授らが膵臓と消化管のNETを調べた研究で、17年に7千人余り



だった患者が22年には1万1千人を超えた。市川教授は「もう希少ながんとは言えない状況だ」と話す。

NETは「神経内分泌腫瘍」の名の通り、ホルモンを分泌する神経内分泌細胞に由来する腫瘍。型によって血糖値を調節するインスリンやグルカゴン、胃酸分泌に関わるガストリンなどのホルモンが異常に分泌され、体の不調を起こして発見されることが多い。

だが、横浜市大の患者ではそうしたホルモンを異常分泌するタイプは約1割。ほとんどは無症状のまま進行するのが厄介だという。

同大の小林規俊准教授は「診断方法は確立しており、一般的な膵臓がん(膵管がん)や大腸がんとしてわかり見分けて診断することが大切」と話す。

小林准教授によると、進行して転移が増えたと根治は難しいものの、治療法は年々進歩している。転移がないか、転移が限られている場合は手術により切除し、さらに腫瘍の性質や進行度に応じてホルモン剤や抗がん剤、分子標的薬など

を用いて治療することで成績も向上してきたという。

海外で新治療法も

新たな治療法として、29年以降、欧米で相次いで承認されたのが、ペプチド受容体核医学内用療法(PRET)だ。放射性物質にNETの細胞に結びつく性質を持たせ、腫瘍に集めて至近から放射線でたたく。

金沢大の絹谷清剛教授(核医学)によると、静脈に注射すると全身に行きわたり、転移した腫瘍にも取り付く。海外では既に標準治療の一つとなっている。

ただ日本では、欧米と主な発生臓器が違うことなどが指摘されて臨床試験に時間がかかり、未承認だ。この治療を求めて横浜市大が提携するスイスの大学病院に渡航する患者もいるが、経済的、体力的に負担が大きい。横浜市大が渡航患者に尋ねた調査では、標準的な3回の治療のため総額約550万円かかった例も。

患者らは医師らと連携し、国内でもこの治療を受けられるよう国に早期承認を訴えている。